玉　垣　良　典

『日本資本主義構造分析序説』

日本評論社　1971. 5　265, 12 ページ

昨年のニクソン・ショック以来，戦後体制の崩壊がさけばれ，また日本経済の新たな転形が強調されている。崩壊や転形を，どのような内容でとらえるかが問題ではあるが，すくなくとも戦後4半紀以上もつづいた，いわゆる戦後体制が崩壊したことはまちがいない。それと同時に，これまで一定の安定と高度成長を謳歌した日本経済もまた，ひとつの重大な転機をむかえているとみることができる。

日本経済については，それこそ枚挙にいとまのないほど，数多くの研究が発表されている。とくに，最近の日本経済の高度成長については多くが語られているが，戦後体制を全体的にとらえ，しかも歴史的に発展の過程を総括した研究は，けっして多いとはいえない。しかし，現実からの要請は，そうした歴史的総括をもとめているし，いまやそういう時期をむかえているといえる。

本書が，そのような今日的要請にこたえるべく，じつにタイムリーに出版されたことを，まず著者のために喜びたい。あらためて紹介するまでもなく，著者は研究者の世代順からいうと，いわば第一次戦後派にぞくする。日本経済の復興・再建期の混乱のなかで研究への問題意識にめざめ，そして昭和30年代の高度成長のなかで研究をつづけ，いまその最大の転機を見すえながら，研究成果を発表する世代なのである。

本書のなかに，第一次戦後派である著者の研究の軌跡をみたとしても，けっして不思議ではあるまい。昭和30年代の日本経済の高度成長のメカニズム解明を焦点にすえて，戦前との対比において戦後段階規定をこころみようとした本書のモチーフそのものが，それを雄弁にものがたっているともいえる。というより，冒頭の緒論「現代日本資本主義構造分析の課題と方法」のなかで，むしろ著者自身が，戦後の日本資本主義研究史を整理しつつ，そうした事情について書いているのである。

著者は「緒論」において，「分析視角と分析方法」についてのべているが，まず「生産力視点が特別に重視され，この分析視点を頑なまでに固執している」と主張する。つまり，みずから「生産力理論」の立場にたつことを宣言するのであって，その点では，戦前からのいわゆる講座派の立場の継承を自認しているといっていい。ただ，戦前の講座派およびその系列が，日本資本主義の特殊性，後進性の型を固定化し，生産力的に前近代的構造を強調していたのに反して，著者の立場は逆転する。つまり，重化学工業による産業構造の高度化を強調し，生産力的に現代＝超近代化としての型を戦後段階規定にもとめる立場にほかならない。このように著者がみずから旗色を鮮明にしたことによって，戦前の旧講座派から，今日のいわゆる構造改革論への研究史的展開が，政治的立場の対立にもかかわらず，「生産力理論」の立場という点で共通の一貫性をもっていることがはっきりした。

つぎに分析方法だが，「生産力理論」の立場から，生産力体系の展開軸を重化学工業，とりわけ量産型機械工業におき，「生産資本循環を基礎視角とするところの日本資本主義の再生産構造分析である」と主張する。そして，あくまで生産資本循環の基礎視角に考察を限定しているゆえに，「W′……W′ 基準への連繋・総括の次元から W……W′ 基準と G……G′ 基準の照応・交錯の分析次元に上向展開」の余地がのこされていると付言している。このように資本の流通過程における姿態変換としての三つの循環形式を使って，それぞれの形式で再生産構造分析をこころみる方法こそ，旧講座派以来の伝統なのだが，このような方法的見地は著者が考えているほどには自明ではあるまい。なぜなら『資本論』第二巻の資本の三循環形式は，たんに資本の循環の形式にすぎないし，また三つの形式は統一された全体を構成しているばかりでない。また，循環形式そのものは，いうまでもなく再生産論の内容でもないからである。いずれにしても，資本蓄積と再生産が，P……P に還元されたかたちでとらえているのが，本書の方法的見地なのである。

さて，本書の内容だが，第一章では，戦後の重化学工業の確立と展開を明らかにするために，戦時下での重化学工業化をまず考察する。つまり，1929 年の大恐慌以後の発展を昭和11年をはさんで前期と後期の二階梯に分ける。そして，前期にみとめられた重化学工業化の平和的発展と軍事的発展の二重性が，後期において戦時経済へと強力的に引入れられたとみる。そして，軍事的発展は「労働集約的重化学工業化」の矛盾や「智能的労働力」および技術者の不足によって，敗戦とともに挫折する。ところが戦後は，重化学工業の平和的発展がとって代り，労働生産性の上昇をともないながら，量産型機械工業の確立となって実現したとみるのである。

第二章では，戦後の重化学工業の発展を，さらに昭和30年を画期として二階梯に分ける。そして，後期にそく

して，重化学工業における生産力構造を具体的に分析するが，そのさい(1)鉄鋼——機械，(2)石油精製——化学——繊維(3)鉄鋼，窯業土石——建設の三系列の展開軸を摘出する。このような生産力構造の内在的な関連のゆえに，戦前の軍需や輸出依存型から，戦後は民需依存型，国内市場依存型の循環構造へ転換をとげたと主張するのである。さらに，右の三系列では，(1)の金属——機械を主軸とみなし，それが量産的機械工業として発展開花した事実を強調する。しかも，機械工業において，経営・労働関係の変革と耐久消費財需要の定着の意義を具体的に論ずるのであるが，そうした分析をふまえながら，もはや日本資本主義の発展を，戦後性や後進性，脆弱性などの特殊構造論によって解明することの不可能なことを力説している。

第三章についてみよう。ここでは，上記の生産力構造をふまえて，「再生産構造＝生産諸関係編成」が「資本と労働力の対応的再生産」として説かれる。まず資本の側については，戦前の旧財閥型コンツェルンが崩壊をとげ，日本型寡占へ転回したことが分析されるが，とくに戦後の経営管理組織の特徴や経営者支配が具体的に解明されている。そのうえで，さらに「新鋭重化学資本」「建設資本」「消費財部門」を抽出して，資本類型として考察を補足する。そして，その三資本類型にそくして，それぞれ労働力の特質をのべるが，このばあい「新鋭重化学資本」と「建設資本」とについては，それぞれ労働力の階層がむすびつけられながら，「消費財部門」については，「自営業部門と労働力排出機構」というかたちで，いわば中間形態として処理されたままにおわっている。その点では，いささか類型化に無理がでているようにもみえる。

第四章であるが，ここでは「再生産構造の動態分析」がこころみられている。ただ動態分析といっても，時系列的に構造変化の分析ではなく，急速な技術革新によって，階層的に「諸企業群の新生，交替，淘汰の過程」が，いかに再編・再生産されたかが考察されているにすぎない。ただ，そのように限定された分析も，具体的な運動形態としては，著者も景気循環の過程分析にまですすまなければならないとことわっているが，もっぱら寡占体制のもとでの企業階層の再編動態が分析されているのである。とくに，典型的な産業として繊維工業と輸送機械製造業の二つをえらび，それぞれの内部における再編動態が具体的に検討されていて興味ぶかい。

終章では，以上のような考察を総括して，日本資本主義を国家独占資本主義として把握する見地が提示されている。ここでは，いわゆる構造改革論的な見地から，国家独占資本主義が新たな生産力段階における独自の生産関係に立脚する点が事実上前提されているようにみえるが，要するに日本資本主義が戦後段階において，「独占資本主義と国家独占資本主義」の二段階規定を同時重層的に貫徹した点が確認されている。そこに，日本の国家独占資本主義に内在する一般性と特殊性が指摘されているのであり，さらに欧米先進国と異なった「内生的投資圧力」の恒常的存在が強調されている。したがって，日本資本主義の矛盾は，かって講座派の主張した前近代の問題としてではなく，「生産力理論」にもとづいて，いわば超近代の問題としてとらえられつつ，戦後段階が特殊構造論の型に骨化されるわけなのである。

なお，付論として「戦前期の日本資本主義」「日本資本主義の国際環境」の二論稿が収められている。しかし，紙数の関係で紹介は省略するとして，以上でわかるとおり，著者はきわめて大胆卒直に戦後の日本経済分析にメスをふるっている。いささか強引で無理なわり切り方もみられないわけではないが，それだけに日本経済の特質が明確になったといっていい。とくに，重化学工業における生産力構造の解明はすぐれたものであって，それとの関連で資本類型や労働力の質を分析した点も，一応の成功をおさめているとみていいだろう。これにたいして，「生産力理論」の現代版とか，講座派理論の再版といったレッテル貼りですますことはゆるされない。

ただ，やはり本書の分析視角と方法的見地からくる制約をみとめないわけにはいかないのであって，さしあたり二点を指摘しておきたい。第一は，資本の蓄積・再生産をP……P循環形式からとらえる方法によるのであろうが，資本蓄積におけるマネタリーな側面がすっかり抜け落ちている点は見のがせない。著者は，それを補足するつもりだろうが，しかし資本と労働力の結合や再生産構造の動態分析について，財政・金融面をぬきにしたら，とりわけ国家独占資本主義分析であるだけに，基本的な側面の分析が無視されたことにならないか。第二は，昭和30年代はともかくとして，昭和40年代において，輸出の主導する側面が高まり，いよいよ資本輸出の本格化をむかえようとしている今日，時系列的な動態分析をぬきにして，再生産構造の解明をこころみるわけにはいかないのではないか。その点では，「生産力理論」にもとづく型の固定化を本書もまぬがれていないように思われるが，そうした不満をこえて，本書は第一次戦後派の意欲的な現代日本資本主義分析として，高く評価されるべきであろう。

【大　内　秀　明】